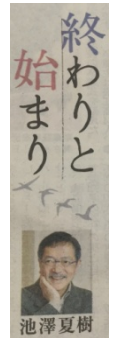


真偽の彼岸に立つ国家

表題は朝日新聞 3 月 1 日夕刊、池澤夏樹「終わりと始まり」。池澤さんらしく、トランプ大統領と「事実」、日本の首相、メディアなどについても鋭く迫る。

トランプ大統領については言うべきことが多すぎる。誰でも何か言いたくなるし、言えることはいくらでもある。だが何を言っても本人には届かない。馬の耳になんまんだぶ。……



我々には Trumpabe (トランプイブ、トランプ=安倍)の方が深刻な問題だ。この a を大文字にする必要もないほどの滑らかな接合ぶり。プードルの尻尾のように振り回されて、みっともないいたらありゃしない。

しかし何を言おうとドナルド・トランプは現実に大統領である。この人物の手の中に核戦争を始める権限がある。彼はコスト計算でそちらを選びかねない。安上がりの戦争を選ぶのが deal (取引) ということだろうか。大統領になっても政治家にはなっていない。未だ実業家のまま。

政治家には良くも悪くも理念があるが、実業家に利潤しかない。しかも金融資本のせいで実業家は虚業家になり、その王様がトランプだ。政治と虚業では行動の原理が違う、と要約してしまってもいいものかどうか。虚業だから就任式に参加した人の数が「史上最大に見えた」とぬけぬけと言う。オリンピック・パラリンピックの誘致に際して安倍首相が「フクシマの放射能はアンダーコントロール」と言ったのと同じ種類の「オルタナティブ・ファクト」、すなわち、万民認知の事実とは異なる事実。

素人の言葉が洪水となって報道マーケットを水浸しにする。受け手の方は、それが事実であるか否かを問うことなく、好みのものだけを選択して受け取る。アプリケーションがこの傾向を増幅し、他の意見に接する道を閉ざす。だからなんでもあり、言いたい放題。つまり言ってしまうえば勝ちなのだ。メディアは後を追ってチェックするが、その時には嘘つきは先の方で別の嘘をついている。言論は流動化し液状化する。ずぶずぶとどこまでも沈む。誰もが言うばかりで聞こうとはしない。

ドナルド・トランプは実業家としてこういう社会の雰囲気をよく知っていて、それを大統領選に応用した。資本主義の勝利者を貧民が賛美する、というグロテスクな構図が現実のものとなった。外野のぼくたちがトランプイブなどといくら^や揶^ゆしても、それは正に^ど螻^{ろう}の斧^{おの}でしかない。「放射能はアンダーコントロール」という真^まっ赤^{あか}な嘘の向こうに崩壊した東芝の社屋や工場が見える。原発のコストもまた国家認定のオルタナティブ・ファクトだった。結局はとんでもなく高いものについた。

(2017 年 3 月 6 日)